

新刊紹介

李愛淑翻訳・小嶋菜温子監修

『다케토리 이야기』(竹取物語)

青木慎一

韓国における日本文学研究の第一人者である李愛淑氏が『竹取物語』を韓国語訳と挿絵で鑑賞する新たな一書を公刊された。

韓国語訳は二〇一五年にミン・ビヨンフン氏の訳が、現代語訳と挿絵で『竹取物語』を読む企画は二〇〇三年に日本で『本物の絵巻を現代語で読む 竹取物語絵巻』(樺島忠夫文・巻頭解説、杉本まゆこ巻末解説、勉誠出版)が出版されている。また、挿絵入りの翻訳にデンマーク語版(二〇一九年)とエストニア語版(二〇二三年)があるが、アジアでは初の試みとなる。そして、本書には、一般読者を意識した親しみやすい訳、部分拡大図の活用、原本の色合いに即したカラーマネージメントなど、細やかな配慮が見て取れる。なお、監修の小嶋菜温子氏(本学名誉教授)による新刊紹介がすでにあり、『立正大学文学部論叢』第一

四六号、二〇二三年三月)、物語学の見地からの意義や韓国における位置付けについての説明は尽くされているため、本稿では絵の役割や文化的な側面を中心に紹介したい。

本書は、一般読者に平易の訳を提供するという点に限っても極めて意義深く、絵画資料と合わせて読む構成は画期的であった。いわゆる「古典離れ」はこの国でも直面する問題であり、外国の古典文学の訳文となれば、読者に手に取ってもらうハードルはなおのこと上がるに違いない。そのような背景に思いを巡らせると、豪華で細密な物語絵の挿絵は、読者への訴求を高めつつ物語内容を理解しやすくする利点を生んでおり、著者の深慮がうかがえよう。李氏が「木こりと仙女」のような話型、「王朝社会を背景とする歴史ドラマ」と解説で触れるように、「竹取物語」は韓国の物語と通じる要素がある。日本で韓流ドラマが定着したように、韓国でも『竹取物語』が受け入れられる素地があるのではないか。すでに周知されている『源氏物語』に続き、『竹取物語』に対する理解が韓国で深まることが期待される。

そして、本書は「四〇〇年の伝統名画とともに読む」との副題の通り、全巻カラーで場面に即した挿絵が付く。その挿絵には二〇〇六年度に文部科学省の補助金交付を受けて購入した「竹取物語絵巻」を中心に本学図書館所蔵の絵巻・絵本・屏風(色紙)が用いられている(先述のデンマーク語版、エストニア語版とも本学図書館が所蔵する作品を挿絵とする)。現存する竹取物語絵の多くが十七世紀に作られたもので、本学図書館の所蔵品もこの作品群に含まれる。この時期に作られた作品は、一卷から五〜六図を絵画化することが多く、比較的話の短い『竹取物語』の場合は、三巻仕立てで十五〜十八図が描かれる傾向にある。ただ、作品ごとに絵画化の傾向が異なるため、話の展開に即して挿絵を配そうにも、一作品では物語全編に対応する絵を確保できない問題に当たるのである。しかし、本書は複数の絵巻や絵本などから絵を採用することで、主要なエピソードに絵を入れることを可能にした。

また、絵だけでなく、絵巻の本文(詞書)をカラーで掲載していることにも着目されたい。日本でも古典や書道に縁がなければ

解説できない文字でも、それを載せることにより、十七世紀に絵巻を鑑賞した読者と同じような感覚を味わえる。訳文から物語内容を把握し、絵を目にするという、当時の読者の追体験を翻訳で達成することこそ、本書の狙いであり、工夫であるのだ。

さらに、本書では同じ場面で複数の絵を配する箇所が見られる。関心の高い読者であれば、絵を見比べ、描写の違いを考えることで、原文さながらに物語を「読み解く」楽しさも感じられるに違いない。

なお、巻末には監修の小嶋氏により、絵の種類や伝統、物語の読解と絵のつながりなど、絵と物語の関連をめぐる解説が付される。

これまで本書の特色を紹介してきたが、原典の翻訳と普及に絵を取り入れる方法は原典の理解・読解における視覚資料の活用という学術研究の課題にも援用できる。また、本書の刊行は、本学が所蔵する竹取物語絵の文化的価値を再認識する好機でもあらう。

本書の試みは単なる翻訳にとどまらず、文字テキストと視覚テキストの融合、文化財の積極的利用、研究者と所蔵機関の国際

連携など、重要な視座を含んでおり、文学研究の発展を目指す上で大いに参考となるはずだ。

(二〇二三年二月 韓国・国立放送大学出版文化院 A4判 一〇四頁 一八〇〇ウオン)

(あおきしんいち 本学兼任講師)